

ヘルダーリンとベートーヴェン —時代を共有した2人の思想と作品について

山崎輝美 (東京藝術大学)

本発表は、ヘルダーリンとベートーヴェンの言葉や記号、音楽といった課題における関係性を考察するものである。ヘルダーリンとベートーヴェンは、ヘーゲルと同じ1770年生まれであり、ロマン主義を代表する芸術家でもある。しかし、両者がお互いに書簡を交換したといった交流などの記録はなく、私的な接点については定かでない。しかし2人の共通項は、カント、ゲーテ、シラーとビッグネームを連ねる。さらにフランス革命など大きな時代の変化は、彼らの感性を刺激し、思想や作品制作に影響を及ぼしていることは間違いない。またディルタイは『体験と創作』で、ベートーヴェンの発展における器楽の完成が、言葉によらない感情の表現をもたらしたと述べ、ヘルダーリン、ティーク、ノヴァーリスらが、言語的想像力の持つより大きな可能性を探求するに至ったと指摘する。以上のことから、ヘルダーリンとベートーヴェンの共通項を考察することは、2人の思想や作品制作における言葉や記号、音楽といった課題についての関係性を明らかにすることであり、芸術家として2人が後世に与えた影響をも明示することが出来ると考えられる。

例えば2人の共通の知人シラーは、2人の師であるといえるだろう。シラーは、ヘルダーリンに家庭教師の職を紹介したり、自宅に招いたりしている。イエーナでは、ヘルダーリンがシラーの家を訪れた際、ゲーテもその場に居合わせたこともあった。またベートーヴェンに関して言えば、シラーが第九の「喜びの歌」の作詞者であることは周知の通りである。またベートーヴェンは、カント哲学の講義をシラーから受け、さらにカントの著作の一節を抜き書きしたりするなど、その哲学理論に興味を示していたことは確かである。このことは、ベートーヴェンの音楽が哲学的であると評される理由の一つとも考えられる。

またリーツラー (Walter Riezler) は『ベートーヴェン』で、シューマンがベートーヴェンについて評していることに対して、ヘルダーリンの哲学的断片「アフォリズム」から一節を引用し、ヘルダーリンも同様のことを最も深い言葉で語っていると述べている。

このようにヘルダーリンとベートーヴェンの共通項を考察することによって、ドイツロマン主義、ドイツ観念論の潮流の中で、言葉や記号、音楽といった課題を通して2人の思想、表現に共通点があることは明らかである。2人は何を感じ何を表現したのか。2人は、正しく19世紀後半から20世紀にかけての芸術の新しい表現の先駆けであると考えられるのである。